

諏訪小だより

令和6年6月30日
7月号
多摩市立諏訪小学校
校長 齋藤 幸之介

「問い」から発する活動を目指してー「夏チャレ」に託すこと 校長 齋藤幸之介

過日実施いたしました学校公開には多数御参観くださいまして誠にありがとうございました。御子様の様子の一端をご覧いただけたのではないかと思います。限られた時間や場でございました。御面倒や御不便をおかけしたかと思えます。改めまして御意見を頂戴し、改善を図ってまいります。今後共どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、6月26日(水)、ホームページに本年度の「夏チャレ」について掲載をいたしました。改めまして、お読みいただいて御理解と御協力を賜ればと存じます。

個人的に解けない謎ー「問い」

私には、なかなか解けない謎のようなものがあります。それは「問い」です。辞書等を引いても私にとって納得ができる意味を見出すことができません。私共が教科等の授業を計画する際に用いる「学習指導要領」やその解説には、例えば「問いを設ける」といった表現が出てきます。しかし、そこには主語は示されていません。教師が設けるのか、それとも子供たちが自ら設定するのか、実は悩ましいところです。

問いがなぜ必要か、と問うたときに、例えばそれが「子供たちの主体性を育むから」という回答は得られると予想されます。ちなみに、今教科等の学習で求められる「主体性」の要素には、「粘り強く」と「学習の調整」、例えばめあてをもつことや学習を振り返りながらめあての達成のために場合によっては取組み方を変えていく、などということが込められています。だからこそ、学習の出発点ともなる問いは重要です。しかし、その問いはどうやって生まれるのでしょうか。

「情動」ー「問い」を生むために

悶々としていたあるとき、私は知人から次の言葉を教わりました。それは「身体や情動」です。このことを松下良平という方は『「これ」や「あれ」を身体で受けとめ、そこから生じた情動が驚きや

不思議といった感覚を呼び起こすとき、問いが誘発される』とおっしゃっています。

「情動」とはということなのでしょう。松下先生によれば、例えば、「乳児の場合はもっぱら喜怒哀楽の類」と説明されています。

成長するにつれて、子供たちは「事態や事物の意味も求め、やがて現象の因果関係や背後関係も知ろうとする」ようになる一方で、「並行して情動は、感動や愉悦、陶醉、羨望、悔恨、慚愧、恥辱、屈辱嫉妬などを伴うようになる」とされています。そして、「情動が深く身体に刻み込まれるほどに、問いは切実なものになり、それだけ強く学習を動機づけ」、「解決の方向をも示唆する」とされます。さらに、例えば悲しさや悔しさは喜びやうれしさに、怒りや憤りは平静や不安に、と転換されるために解決しようとする、ということになります。

御家庭にぜひお力添えをいただきたいこと

本校の教職員は、子供たちの心を揺さぶろうと日々悪戦苦闘しています。例えば、算数科で買い物に行く場面を取り上げる際にも「どうしたらここに切実感や解決しようとする気持ちをもたせるか」に苦勞しています。

正直、全ての子供たちに同じ問題意識をもたせることは難しくあります。だからこそ、と申し上げてよいでしょうか。一人一人の子供たちが日々感じ、それこそ心の中で湧き上がってくる「情動」を契機として取り組む機会が夏休みがあれば、という気持ちであります。

大変恐縮ではありますが、御理解と御協力を賜りたく存じます。

<参考>

「探究としての学びを支える道徳と身体ー知の地殻変動の時代に備えるー」(松下良平、2024年、教育研究(2024年6月号、初等教育研究所))